

神戸大学

出光佐三記念六甲台講堂 歴史案内



左：「再生」された出光佐三記念六甲台講堂の外観
右：出光佐三記念六甲台講堂の銘板
(前神戸大学長野上智行揮毫)
(左右共 2009 年 10 月)

■六甲台講堂関係年表

年	月 日	事項
1902(明治35)年	3月 27日	神戸高等商業学校が設置される(初代校長水島鍊也)。これをもって神戸大学の「創立の起点」とする(1990(平成2)年9月13日神戸大学評議会決定)。
1929(昭和4)年	4月 1日	神戸高等商業学校、大学に昇格して神戸商業大学となる(初代学長田崎慎治)。
1935(昭和10)年	3月 31日	神戸商業大学講堂が竣工。
	10月 25日	神戸商業大学新学舎竣工式を講堂で挙げる。
1938(昭和13)年	10月 一	講堂の壁画三部作「富士」「光明」「雄図」(中山正實作)が完成、11月3日一般学生に公開される。
1944(昭和19)年	10月 1日	神戸商業大学を神戸経済大学と改称。
1946(昭和21)年	7月 5日	連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)、神戸経済大学講堂等の接收を決定(11月29日、GHQは東京中央終戦連絡事務局を介して日本国政府と神戸経済大学講堂等接收の覚書を交わす。翌年接收。接收中の講堂は進駐軍将校家族用の映画館等に利用される)。
1949(昭和24)年	5月 31日	学制改革により神戸大学が設置される(初代学長田中保太郎)。
	11月 1日	講堂は「六甲台講堂」と通称され、接收中も入学式等の式典での利用が許される。
	11月 1日	神戸大学開学式を六甲台講堂で挙げる。
1952(昭和27)年	4月 10日	六甲台講堂等の接收が解除される。
1969(昭和44)年	3月 一	大学紛争により1968(昭和43)年度学士試験合格証書授与式(卒業式)を挙行せず。
	4月 一	大学紛争により1969(昭和44)年度入学式を挙行せず(前年度が六甲台講堂での最後の入学式となる(但し、震災後の1995(平成7)年度入学式を除く))。
	5月 17日	大学紛争により六甲台講堂前庭の水島鍊也胸像等が一部壊される。
1970(昭和45)年	3月 一	大学紛争により1969(昭和44)年度学士試験合格証書授与式(卒業式)を挙行せず。
1977(昭和52)年	3月 25日	1976(昭和51)年度学士試験合格証書授与式(卒業式)を挙げる(六甲台講堂での最後の学部卒業式となる(但し、震災後の1994(平成6)年度卒業証書授与式を除く))。
	10月 一	中山正實により六甲台講堂の壁画が修復される。
1979(昭和54)年	3月 26日	六甲台講堂改装工事が完成する(窓枠サッシ、天井の修理、1階椅子の取り替え等)。
	12月 1日	財団法人神戸大学六甲台後援会からの寄附金百万円(10月25日寄附)により六甲台講堂の緞帳が更新される。
1995(平成7)年	1月 17日	兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)が発生。学生・教職員計41名(他に神戸商船大学で6名)が犠牲となる。
	3月 17日	兵庫県南部地震神戸大学犠牲者合同慰霊祭を六甲台講堂で挙げる。
	3月 24日	兵庫県南部地震により1994(平成6)年度卒業証書授与式を六甲台講堂及び講義室等で挙げる。
	4月 6日	兵庫県南部地震により1995(平成7)年度入学式を六甲台講堂及び講義室等で挙げる。
1996(平成8)年	3月 25日	1995(平成7)年度修士・博士学位記授与式を挙げる(六甲台講堂での最後の修士学位記授与式となる)。
2003(平成15)年	3月 18日	六甲台講堂が六甲台本館・兼松記念館・社会科学系図書館と共に国の登録有形文化財となる。
2005(平成17)年	3月 25日	2004(平成16)年度博士学位記授与式を挙げる(六甲台講堂での最後の博士学位記授与式となる)。
2009(平成21)年	7月 7日	神戸大学、六甲台講堂の建物名称を「神戸大学出光佐三記念六甲台講堂」とすることに決定(出光興産株式会社から神戸大学基金創設記念事業「六甲台講堂の再生」に多大な支援をいただいたことを顕彰し創業者出光佐三(1909(明治42)年卒)の名を冠した)。
	10月 31日	第4回ホームカミングデイの記念式典において六甲台講堂「再生」工事完成披露。 財団法人神戸大学六甲台後援会の援助により六甲台講堂の壁画が修復され、同式典にて披露。

神戸大学出光佐三記念六甲台講堂

あゆみ

講堂の誕生

神戸大学六甲台講堂は、1934(昭和9)年9月28日、旧制神戸商業大学の講堂として起工、半年後の1935(昭和10)年3月31日に竣工した。設計は文部大臣官房建築課、施工は大林組がそれぞれ担当した。建築面積750㎡、延床面積1,007㎡、総工費は11万4,050円であった。

なお、建物内の壁画三部作「富士」「光明」「雄図」は、1938(昭和13)年に洋画家中山正實(なかつま・まさみ、1919(大正8)年卒)によって描かれた大作である(壁画三部作及び中山の詳細は後述する)。

建物について

六甲台講堂の建物は、中世ロマネスク様式の重厚かつ優美な鉄筋コンクリート造の2階建てであり、2階はギャラリーとなっている。外壁は淡黄色のスクラッチ・タイル張りである。スクラッチ・タイルは、櫛(く)で引かれたような縦線の模様をもつタイルで、大正末期から昭和初期にかけて日本で大流行した外装材であり、F.L. ライトが設計した帝国ホテルに用いられたことでも有名である。軒下のパラペット部分は、ロンバルディア・アーチと呼ばれる小さなアーチの繰り返し模様のテラコッタ張りで仕上げられている。

正面玄関には背の高い五連アーチが並び、玄関の扉には国際貿易都市神戸にふさわしく船の操舵輪を模した装飾が施されている。扉の上部の壁面には帆船をイメージさせる幾何学的デザインが配され、アーチ最上部の丸窓は、ボルトナットで取り付けられた船の舷窓を連想させる。大海原を渡り世界中で活躍する国際的商業人の育成に努めた旧制神戸高等商業学校初代校長の水島鏡也(みずしま・てつや)の理念が息づくかのようなのである。なお、講堂前庭には水島の胸像(制作朝倉文夫、銘板揮毫洪沢栄一)が置かれ、慈父のごとき温かいまなざして道行く学生たちを見守っている。

戦時中の黒塗り

竣工当初は東隣の本館(現在の六甲台本館)とともに「白亜の殿堂」と称揚された。しかし戦時中は、この美しい外観が仇(あだ)となった。「白々と空襲目標が山上に聳(その)え立つのは迷惑である」との周辺住民からのクレームが相次いだ。ついには建物をカモフラージュするため本館とともに黒ベンキで外壁を塗りたくることとなった。垂れ落ちたベンキが玄関先を黒く汚し、みすばらしい姿をさらして敗戦となる。

進駐軍による接收

敗戦により講堂は連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)に接收された。学舎全面接收の危機の中で、接收直前まで学長花戸龍蔵、教授田中保太郎(神戸大学初代学長)らが、卒業生である出光佐三の協力により出光興産株式会社を拠点としてGHQ教育局等に日参、他の卒業生たちの尽力もあり、接收は講堂・テニスコート・プールなどの最小限にとどまった。接收中、講堂は「コーベ・テ(シ)アター」・「アーニー・バイル劇場」・「六甲ハイツ・シアター」等と称され、進駐軍将校家族用の映画館等に利用された。

接收は1947(昭和22)年から1952(昭和27)年4月10日の返還までの約5年間続いた。戦時中に黒塗りされた外壁は、進駐軍の手で白く塗り直されたが、接收を逃れた本館は黒塗りのままだったため、白と黒の奇妙なコントラストとなった。

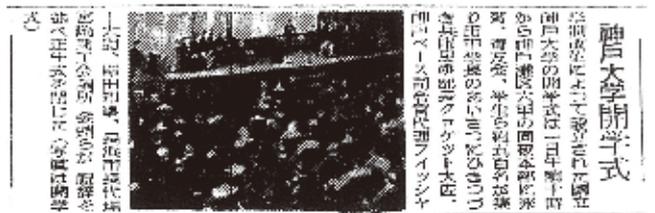


▲ 白亜の講堂(左)と黒塗りのままだ本館(右)

1954(昭和29)年頃



▲ 竣工まもなくの旧制神戸商業大学講堂 1937(昭和12)年頃



▲ 新制神戸大学開学式の模様を報じる『神戸新聞』記事 1949(昭和24)年11月



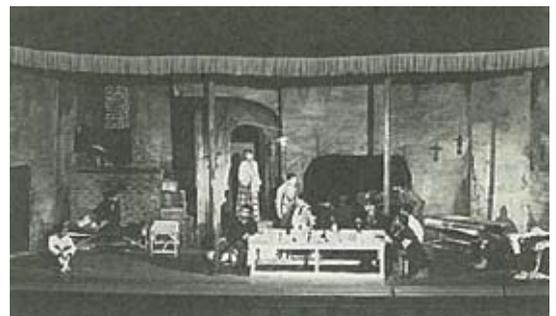
▲ 旧制神戸高等商業学校初代校長 水島鏡也の胸像(「再生」工事直前)



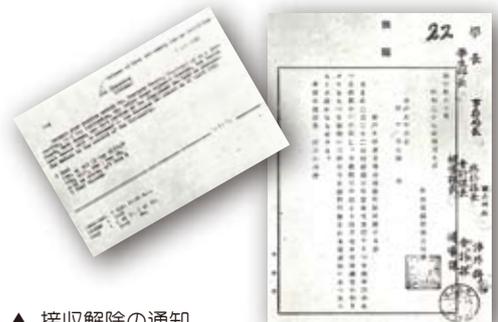
▲ 正面玄関扉の装飾(「再生」工事直前)



▲ 1938(昭和13)年、中山正實作の壁画三部作 2008(平成20)年撮影



▲ 接收解除直後に行われた神戸大学演劇研究会の公演「どん底」(ゴーリキー作) 1952(昭和27)年5月



▲ 接收解除の通知 1952(昭和27)年4月



▲ 神戸大学第2回学士試験合格証書授与式(卒業式)
1954(昭和29)年3月



▲ 大学紛争時に六甲台講堂で開かれた教養部
学生大会。全共闘学生の妨害により学生が負
傷し大会不成立となる 1969(昭和44)年8月



▲ 「六甲台祭」でのコンサート
立ち見が出るほどの熱狂ぶり
1978(昭和53)年頃

■悠久の殿堂

1949(昭和24)年5月31日、新制神戸大学が誕生した。当時、講堂は接收中であった。学内では通称「六甲台講堂」と呼ばれ、接收中も入学式・卒業式等の式典での利用が許された。1952(昭和27)年に接收解除となった後も、公式行事の多くが六甲台講堂で行われ、学部を問わず多数の神大生がここから巣立っていった。

しかし、大学紛争の影響により、1968(昭和43)年度学士試験合格証書授与式(卒業式)、1969(昭和44)年度入学式、同年度学士試験合格証書授与式が実施されず、大学紛争直前の1968(昭和43)年度入学式が、六甲台講堂での最後の入学式となった。以後、入学式は、1970(昭和45)年度は「神戸国際会館大ホール」、1971(昭和46)～1973(昭和48)年度は「神戸市立中央体育館」、1974(昭和49)～1982(昭和57)年度は「神戸文化ホール」、1983(昭和58)～1986(昭和61)年度は神戸国際会館大ホール、1987(昭和62)～1994(平成6)年度は「兵庫県立文化体育館多目的ホール」、1995(平成7)年度は後述、1996(平成8)年度からは神戸ポートアイランド「ワールド記念ホール」で挙行された。また卒業式は、1976(昭和51)年度学士試験合格証書授与式が六甲台講堂での最後となった。以後、卒業式は、1977(昭和52)～1985(昭和60)年度は神戸国際会館大ホール、1986(昭和61)～1993(平成5)年度は兵庫県立文化体育館多目的ホール、1994(平成6)年度は後述、1995(平成7)年度からは神戸ポートアイランドのワールド記念ホールで挙行された。1993(平成5)年度より博士学位記授与式も六甲台講堂(2000(平成12)年度は「神大会館六甲ホール」)で挙行されたが、2004(平成16)年度を最後に神大会館六甲ホールに変更された。

なお、兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)の影響により、2004(平成6)年度卒業証書授与式、2005(平成7)年度入学式は六甲台講堂及び講義室等で挙行され、また兵庫県南部地震神戸大学犠牲者合同慰霊祭(学生39名、職員2名が犠牲)も六甲台講堂で行われた(なお神戸商船大学では6名が犠牲となった)。また、神戸大学ホームカミングデイの記念式典も、2007(平成19)年開催の第2回より六甲台講堂で挙行されている(第1回は神大会館六甲ホール)。

なお、六甲台講堂の建物は、昭和初期の学校建築の好例であり、2003(平成15)年3月18日に「造形の規範となっているもの」として国の登録有形文化財に登録され、同年4月8日文部科学省告示第69号により告示された(登録番号第28-0118号)。今なおその斬新かつ優美な佇まいは見る者を魅了してやまない。

2009(平成21)年7月7日、神戸大学は、神戸大学基金創設記念事業「六甲台講堂の再生」に対して出光興産株式会社から多大な支援を受けたことを顕彰して、六甲台講堂の建物名称に創業者出光佐三(いでみつ・さぞう、1909(明治42)年卒)の名を冠し、「神戸大学出光佐三記念六甲台講堂」とした。同社による支援の背景には、出光佐三が母校神戸高等商業学校で培った学理や教育理念を高く評価しそれを会社の経営理念にも反映させており、また生涯にわたって母校を敬慕し支え続けたという経緯がある。大規模な建物「再生」とともに空調及び音響・映像の最新設備を備えた同講堂は、同年10月31日の第4回神戸大学ホームカミングデイで初披露された。



▲ 兵庫県南部地震神戸大学犠牲者合同慰霊祭。祭壇には犠牲となった学生・教職員計41名の遺影が飾られ、会場は悲しみに包まれた 1995(平成7)年3月



▲ 震災のため六甲台講堂・講義室等で
挙行された平成7年度入学式
1995(平成7)年4月



▲ 電気化学会第68回大会における2000
(平成12)年度ノーベル賞受賞者白川英樹
の講演 2001(平成13)年4月



▲ 国の登録有形文化財となる
2003(平成15)年3月



▲ 第2回神戸大学ホームカミングデイの記念式典
2007(平成19)年9月



▲ 「再生」工事直前の六甲台講堂 2008(平成20)年
(文責：神戸大学百年史編集室講師 野邑理栄子)

神戸大学出光佐三記念六甲台講堂の壁画三部作

壁画三部作について



左「雄図(ゆうと)」



▲ 中山正實作、出光佐三記念六甲台講堂の壁画三部作 (1938年完成)



中央「富士」

上部：富士山頂の図
右下：「大旆(たいはい)を翳(かざ)す」
左下：「平和の使者」

写真はいずれも2008(平成20)年撮影



右「光明」

神戸大学六甲台講堂は、舞台を囲むように描かれた巨大な壁画三部作でも名高い。東京大学安田講堂壁画(小杉放菴作)、九州大学工学部本館会議室壁画(青山熊治作)等と並び称される。洋画家中山正實によって描かれ、1938(昭和13)年に完成した。壁画中央は「富士」、向かって右は「光明」、左は「雄図(ゆうと)」と題され、三位一体で重厚かつ優美な空間を作り出す。直接壁に描かれた壁画は「富士」の富士山頂の図のみであり、他は麻布に描いたものを壁に固着させている。

なお、1977(昭和52)年、中山により最初の修復が行われ、さらに中山没後30年目となる2009(平成21)年、財団法人神戸大学六甲台後援会からの支援の一部を使用して再度修復された。

●「富士」 3つのテーマで構成される。舞台中央上部の富士山頂の図は、中山の言葉*によれば、「日本の過去、現在から未来につながる歴史を象徴したものであり、右下の図「大旆(たいはい)を翳(かざ)す」には、「大学」旗を掲げる青年が描かれ、左下の図「平和の使者」には、平和の象徴である白鳩を放つ青年が描かれている。

●「光明」 荒波が猛る太平洋の彼方に、天から暗雲を破って光明が差し込み、その光を目指して船出の準備に動しむ青年たちの図である。右下に喧噪の中で悠然と寝転ぶ牛の姿が描かれており、中山は「これは農村日本の尊い姿*」だとし、「天運に抗せず、騒音に煩わされず、泰然として天地に呼吸する姿こそ農村日本の頼もきき存在ではないか。若人よ、この牛の存在を忘るるなかれ」と解説**の中で訴えている。

●「雄図」 高く険しい山々を越えんとする馬上の青年たちの図である。峻嶺の連なる厳しい前途に物怖じせず、勇猛果敢に全軍を指揮する「白馬の騎士」こそが「やがて吾等の姿でなければならぬ」と中山は激励している**。



▲ 講堂の壁画を描く中山正實 1938(昭和13)年

* 中山正實「壁画に託するもの」(『凌霄五十年』「凌霄五十年」刊行会、1954年)より
** 中山正實「神戸商業大学講堂壁画三部作について」(パンフレット『壁画三部作 中山正實作』1938年)より

中山 正實 なかやま まさみ



▲ パリで修行中の中山正實 1924(大正13)年

1898(明治31)年1月3日神戸市生まれ。1914(大正3)年から独学で油絵を描き、印象派を研究。1915(大正4)年兵庫県立第二神戸中学校(現・兵庫県立兵庫高等学校)卒業、同年神戸高等商業学校入学、毎年秋季に校内で洋画展を開催。1919(大正8)年神戸高等商業学校卒業、同年、東京商科大学専攻部(現在の一橋大学)で修学の傍ら、川端画学校洋画科に学ぶ。1921(大正10)年第3回帝展にて「鉱山の夕」が初入選。1924(大正13)年フランス・パリに画技習練のため留学。同年、パリのサロン・ドートヌにて「セーヌ河畔の人々」が入選。イタリアでの壁画研究を経て、1927(昭和2)年に帰朝。同年の第8回帝展から1931(昭和6)年の第12回帝展まで連続入選を果たした。

1932(昭和7)年34歳のとき、母校神戸商業大学より図書館壁画「青春」の制作を委嘱される。1935(昭和10)年壁画「青春」を完成、ただちに同大学講堂の壁画三部作の制作に着手。1938(昭和13)年講堂壁画三部作「富士」「光明」「雄図」を完成(40歳)。1940(昭和15)年大和国史館万葉室壁画「阿騎野の朝」、1944(昭和19)年海軍兵学校壁画「海ゆかば」を完成。戦後、1946(昭和21)年連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)通信隊の美術顧問を委嘱される。1966(昭和41)年東京凌霄クラブ開設を記念して図書館壁画「青春」下絵を同クラブに寄贈。1973(昭和48)年図書館壁画「青春」を修復。1976(昭和51)年大阪凌霄クラブ開設を記念して六甲台講堂壁画「光明」「雄図」下絵を同クラブに寄贈。1977(昭和52)年六甲台講堂壁画を修復。1978(昭和53)年神戸大学経済学部・経営学部・法学部・経済経営研究所創立75周年を記念して1926(大正15)年以来描き続けたカラー・エッチング144点を神戸大学に寄贈(現在財団法人六甲台後援会が管理)、1978(昭和53)年5月75周年記念行事の一つとして学内で「カラー・エッチング展」開催、6月さごう神戸店でも開催。

1979(昭和54)年1月7日逝去(享年81)。

(文責：神戸大学百年史編集室講師 野邑理栄子)